

【センバツ速報】三重が佐野日大を破り、2回戦へ

WSJ日・英・中にフルアクセス。ビジネスの今を読む。月額550円、初月無料

原発ニュースウオッチ

# 福島事故から15年 安全にどう生かす リスク、論理的に捉える / 福井

地域 | 福井 | 北信越

毎日新聞 | 2026/3/11 地方版 | 有料記事 | 1517文字



放射線について学ぶ授業で、ラジウムにライトを当て、放射線を観察する若狭高校の生徒たち。福井県小浜市の若狭高校で2025年12月、高橋隆輔撮影

東京電力福島第1原発事故を引き起こした東日本大震災から、11日で15年となった。福島事故は、継続的な住民避難を伴う国内で唯一の事例。現在7基の原発が稼働し、原発増設の動きもある福井県嶺南地方では、事故への備えとして教訓を知っておくことが重要だ。一方で、地元には原発のリスクを語ることをタブー視する風潮もあり、議論の障壁にもなっている。貴重な歴史的事実を「安全」につなげるために重要なこと

は何か。現地での活動や専門家の言葉からは、そのヒントが見えてくる。【高橋隆輔】

福島事故では、事故の経過や風向きに伴い、避難すべき方向がその都度変化した。結果的に、より放射線量の高い方向に住民が避難したり、避難所に到着してすぐさま、さらなる避難を余儀なくされたりするケースがあった。

また、高齢者や入院患者は避難によって体調が悪化したり、死亡したりすることも多かった。高線量下でも、その場にとどまる選択をした高齢者施設の入居者の生存率が最も高いことが数年後の調査で判明するなど、事故時の避難に関する判断や予測の材料となる知見が数多く残されている。

## 自由な議論大切

2月28日、福井県敦賀市で、被ばく量を減らすために一時的に建物内にとどまる「屋内退避」をテーマにしたセミナーが開催された。セミナーには福島県在住の医師と作家が招かれ、福島に蓄積された知見を学んだ。

【広告】 若手デザイナーが切り拓くこれからのファッションとは

【広告】 【不動産査定サイトNo.1】 あなたの不動産の相場がわかる！

【広告】 【囲碁】 3月の次の一手問題に挑戦！只今入会で1ヶ月無料体験

嶺南地方では、福島事故の経験を共有する機会は年に数回程度しかない。原子力に携わる住民が多い地域だけに、原発の危険性に目を向ける発信には抵抗のある住民も少なくないことが背景にある。

このため、セミナーでは参加者が自身の所属を明かすことや、他人の意見を否定することを禁止した。主催したNPO法人「ワネッツ」は、地域の防災力向上を目指し、リスクコミュニケーションの促進を活動の柱にしている。岩崎良人事務局長は「原発の話題は口に出すと『イデオロギーに染まった人』として見られ、タブーになっている」と、地域で住民を広く集めるためには工夫が必要だと説明する。また、「現状に疑問を持ち続けることが安全のための基本的な姿勢。イデオロギーにこだわると思考停止し、疑問を持たなくなる」と、自由な議論は防災上も大切であることも強調した。

「ミナベルホネン」創設者 デザイナー皆川 明さんに聞く

【広告】 毎日ファッション大賞



学校で基礎講座

地域特性の“足かせ”には、学校現場も悩む。

放射線の影響は年齢が低いほど大きいため、学校で周知できれば効果は高いが、保護者の考え方はまちまち。取材にも「横やりが心配」と明かした教育関係者もいた。

福井県小浜市の若狭高では毎年、日本原子力研究開発機構から講師を招き、放射線についての基礎講座を開催している。今年12月の授業では、1年生が実験などを通して放射線は自然界に通常存在し、問題は量であることを学んだ。あくまで目的はデータに基づき、科学的に判断する姿勢を身につけることだが、渡辺久暢校長は「地域に住む者としてのリテラシーも身につければ一石二鳥」とも話し、防災や地域課題を考える基礎となることにも期待する。

### 眠りの質をサポートする新習慣 「GABA配合の飲むお酢」とは

【広告】 ヤマモリ



苦情などへの懸念も職員には当初はあったというが、イデオロギーや経済とは完全に切り離し、「科学」として学ぶ形で授業は続いてきた。渡辺校長は「重要な教育と考えている。学校でもやり方次第で、原子力は扱える」と話した。

災害時の心理に詳しい東京女子大の広瀬弘忠名誉教授（災害リスク学）は「福島事故は重い意味を持っているが、国民は忘れっぽい。地震の『スロースリップ』のように、ゆっくりと危険が近づいていると感じる」と、風化を懸念。「原発の問題は常に新しく展開しているが、情緒に訴えても徐々に薄まっていく。論理的に捉えていくことが重要だ」と提言した。